

国際校庭園庭連合 日本支部設立記念大会



国際校庭園庭連合日本支部
International School Grounds Alliance - Japan
(ISGA-Japan)

Timetable

15:00-15:10 代表挨拶・日本支部設立について

仙田考（鶴見大学短期大学部）

15:15-16:10 基調講演「子どもの育ちに生かす園庭・校庭・まち」
大豆生田啓友（玉川大学、ISGA日本支部顧問）

トークセッション

仙田満（ISGA日本支部顧問）× 大豆生田啓友

16:10-17:30 リレートーク「園庭・校庭・まちの活動や環境を話そう！」

14組の方々による、魅力的な園庭や校庭・まちの活動や環境について

渡辺英則（港北幼稚園）

亀ヶ谷忠宏（宮前幼稚園）

内野彰裕（東京ゆりかご幼稚園）

中林忍（千葉明德短期大学附属幼稚園）

木村創（向山こども園）

鮫島良一（鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園）

近藤良彦（三星幼稚園）

山中あけみ（新杉田のびのび保育園）

榎重善（谷津南小学校 えんやこら 学校環境を考える会）

安江文子（ちいさなたね保育園）

原美紀（横浜市港北区子育て支援拠点どろっぶ）

三橋賢次（飯島幼稚園）

尾上伸一（横浜市立飯島小学校）

18:00-20:00

懇親会



代表挨拶

日本をはじめ、多くの国々では、校庭や園庭環境の価値が十分に認識されず、子どもたちの学び、あそび、生活の環境として、ふさわしくない校庭や園庭の姿が見られます。「国際校庭園庭連合（International School Grounds Alliance, 以下ISGA）」は、豊かな子どもたちの育ちを目指して、2011年に結成された、校庭・園庭環境の活用や改善を支援する団体・個人の国際ネットワークです。ISGAでは1,2年おきに世界各地で国際大会を開催し、2018年11月に、「子どもと校庭・園庭、まち、そして世界から学ぶ」をテーマに、初の日本大会が横浜で開催されました。国内外約250名の方々をご参加くださり、関心の高さがうかがえました。

このたび、子どもたちの豊かなあそび、学び、生活のための、校庭、園庭、まち（まち学習・まち保育）の環境や活動のあり方、そして環境や活動づくりへの可能性について、ともに考え、わかちあうことのできる機会、場となることを目指して、「国際校庭連合日本支部（ISGA-Japan）」を立ち上げました。今後、本団体では、見学会やセミナー等の企画や、HPやニュースレター等での情報発信を行ってまいります。また日本支部として、ISGAとの連携を軸に、海外との情報交流、国際大会参加等を通して、国際的な視点からも日本の校庭、園庭、まちでの可能性を模索していけたらと思います。

日本支部、そして設立記念大会が、みなさまにとりまして、さらなる校庭、園庭、まちの環境、活動に向けて、新たな（小さな）一歩へとつながりましたら大変幸いに存じます。



園庭の意義

実は、法的に「園庭」が規定されたのは、認定こども園関連法からです。これまで、運動場や遊技場という言葉で呼ばれ、その意義についての検証があまりされてきませんでした。

しかし現場に目を向けてみると、セミを捕まえることに没頭していた子どもが、保育者の援助を受けながら、絵本や実体験を通してセミの生態を知っていったり、命について考えたりする機会を得たという素晴らしい事例があります。

また、1歳児が水に出会いながら試行錯誤をしていったり、5歳児が水たまりに船を浮かべようと協働したり、固定遊具をめぐり、議論をしたり…。豊かな園庭環境と保育者がいることで、ただの「運動場」ではない、多様なことが起こっているのが、園庭なのです。

園庭と保育の質

保育の質は、3つの視点で整理されます。それは、構造の質・プロセスの質・実施運営の質です。

日本の園庭環境は非常に多様です。この多様性を生み出す、あるいは、醸成していくためには、構造の質だけで見ることではできません。そ

こには、子どもがいて、保育者がいて、環境が作り出されていきます。だからこそ、質とは何か？を問い直しながら、総合的な視点で園庭を見ていく必要があります。

この意味では、園庭＝園所有の土地と定義する必要はなく、街そのものをフィールドにするということも視野に入れた議論が必要です。

園庭を見る3つの視点

園庭を見る視点として、体を動かすための園庭・ガーデン型の園庭・遊びの拠点の園庭の3つがあります。

小学校にならいグラウンド化されてきた経緯がありますが、体を動かすための築山や高低差が必要です。そして、ガーデン型として、自然を多く取り入れるということ、さらに、拠点として、遊びのコーナーを出したり、あるいは地域の様々な環境（自然・お店・公園）などを貸して遊んだりお散歩をしたりすることも、園庭の機能として大切です。

外遊びについては、今後より多くのエビデンスが必要です。



**基調
講演**

基調講演





仙田
満

建築としての園庭

仙

私は小学生の遊びを研究してましたが、その後幼児の遊びに転向し、近年は、熱中したり夢中になるための環境について研究をします。努力は熱中になれないんですよ。

大

園庭という環境がもちろん大切なんですけど、一人一人が明日もやりたい！という風な感情になるのは、どのくらい環境が必要なんでしょう？

仙

テーマパークの研究では、30種類の遊びが必要なんです。その中から、7~8個、好きな遊びを見つけて遊ぶのでね。これを応用すれば、園庭に30以上は遊べるポイントがあるといいという目安になるでしょうね。

のではないかと思います。ただ、アナーキースペースは、現代社会からはどんどん排除されつつあるのですがね…。

大

宮治真司のいうカオス的な空間ってワクワクしますよね。でも、カオスって一方的に与えられるというわけではないように感じます。柔らかさというか、日本建築でいう `縁側` 的な、中と外の間のような空間があるといいですよ。

仙

そうなんです。カオスには柔らかさと子どもの手はいるということが大切なんです。だからね、空き店舗なんかの活用も面白いんですよ。

街づくりと子ども

仙

子どもが遊ぶ環境には、6つの原空間（自然・オープン・アジト・アナーキー・道・遊具）が必要になります。そう考えると、5,000㎡ほどは必要になります。しかし、それは現実として難しいところが多い。ならば、街の中に作っていくことが大切になっていく

公園の必要性

仙

公園から子どもの姿が消えて久しいんですが、それは安全ではないという機運があるからなんです。だからこそ、カフェや交流スペースなどを作って、大人の居場所も同時に作っていく必要があります。すべての公園にプレイリーダーがいるといいですよ。



Talk Session

12 人の実践家によるリレートーク

